



第44回

ケチャまつり

令和元年7月31日(木)～8月4日(日)
新宿三井ビルディング 55HIROBA

芸能山城組

〒164-0003 東京都中野区東中野1-22-3

Tel 03-3366-4741 Fax 03-3366-4742

mail@yamashirogumi.jp <https://www.yamashirogumi.jp/>

近現代を風靡している**三大錯覚/迷信**への**芸能山城組**からの**ソリューション** **ケチャ**

キーワードは

リードがあれば
ビートが揃う
という錯覚/迷信の
粉碎

スマホさえあれば
という錯覚/迷信の
打破

芸術で食っていく
という錯覚/迷信の
追放

本来(デフォルト・フェイス)の脳

鍵は

鍵は

鍵は

近現代からのダメージ

〈気配〉
||
〈オフライン同期脳機能〉

〈絆〉
||
〈群个体協調脳機能〉

専門(単機能)化しない
||
〈全方位脳機能〉

脳がやられる

解くのは

解くのは

解くのは

以心伝心・阿吽の呼吸によって時差なく一体化する“ケチャ”

〈絆〉の科学・技術・芸術でいのちたちを直に結ぶ“ケチャ”

ズブの素人が初稽古だけで演じ楽しめる“ケチャ”

その実現を脳と体が実感

三大錯覚/迷信の粉碎

それができるのは世界でここだけ
魂のマグマ

ケチャまつり

2019年7月31日～8月4日

近現代の錯覚/迷信を一掃
ケチャで



“ケチャ”とは

“ケチャ”は、バリ島に伝わる呪術「サンヤン」とインドの古代叙事詩「ラーマヤナ」をもとに1933年に誕生した合唱舞踊劇です。バリ・ヒンドゥー寺院の壮麗な儀式門を背景に、夕闇の中、同じ共同体に属する数十人、数百人の半裸の男たちが灯火を囲んで座り、「チャッ、チャッ」という鋭い叫びを發します。その4つのリズムパターンが精緻に組み合わせられ、猛烈な速さの16ビートを刻むさまは圧巻です。その響きの環の中に、華麗な装束を纏った踊り手が登場し、古代絵巻を繰り広げます。

〔リードがあればビートが揃う〕という錯覚／迷信を粉碎する〈ケチャ〉

ケチャは〈オフライン同期〉

ケチャの魅力の最大の源泉「チャッ」という叫びでつくる猛烈な速さの16ビートの綱目模様。それは互いに異なる4種類の「チャッ」というシークエンスのパターンを同時進行に走らせることによってできています。実測すると「チャッ」の回数は、人間に出せる速さの2倍のスピードをもつ1秒間に最高12～13回という信じられない値に達する声のパルス列を実現しています。さらに、図に示すように、同時進行するリズムパターンの「チャッ」の数を縦方向に足し合わせると、2→1→2→1→2→1となることで、強弱のリズムを生んでいます。しかも、この迅速精緻なパターンは、しばしば100人を超える男たちによって、一糸乱れぬ精密さで実現されているのです。

この驚異の16ビートを成り立たせているのは、近代知の射程を超えた地球生命独自の科学性、合理性に基づくもので、私たちはそれを〈オフライン同期〉と呼んでいます。

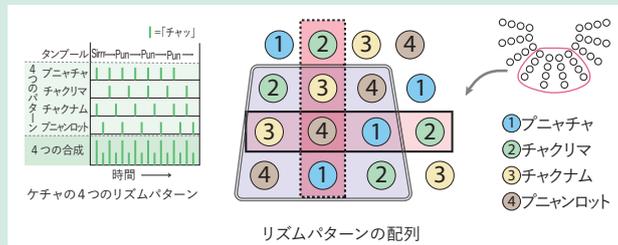
〈オフライン同期〉は、デジタル機器を同一のタイムコード(クロック信号)で制御して動作を一致させる方法、すなわち〈オンライン同期〉とはまったく異なるものです。〈オフライン同期〉は、制御の痕跡さえ見当たらないのに、まるで指揮系統が存在するかのごとく、ケチャの一糸乱れぬリズムを実現するのです。つまり、(リードするものがあってビートが揃う)と信じ込んでいる近現代人にとっては、驚きを通りこして茫然とするほかないほどの出来事です。もちろん、それを電子回路系の粹組で説明することはできません。

〈オフライン同期〉を可能にする仕組は、ケチャの円陣の配列にも仕込まれています。ケチャの円陣は、100人規模になる

と直径20mを優に超えます。音は空気中の移動速度が1秒間に約340mなので、円陣の端から端まで伝わるのに約0.06秒かかります。20mも離れた位置にいるケチャの環の男たちには、「チャッ」という叫び声が約0.06秒「ずれ」で各々の耳に到着することになります。一方、「チャッ」という叫び声は、1秒間に12～13回の頻度なので、「チャッ」と次の「チャッ」の間隔は0.08秒前後、つまり、20m先の「チャッ」が届くまでの約0.06秒の「ずれ」(時差)は0.08秒ごとに刻まれるケチャの16ビートにとってはとうてい無視できないものです。よって音だけを頼りにリズムを合わせることは不可能で、もし他の何かがあればケチャの環全体のリズムは混沌としたものになるでしょう。

ところが、4種類の「チャッ」というパターンの各担当者たちが図のように縦横に均等な空間分布を形成して密に座ると、自分の周り前後左右に4種類のリズムパターンからなる小ユニットができ上がり、それぞれの小ユニットの中で同じようにリズムの噛み合わせが形成されます。このとき、互いの躰が触れ合う密接した距離にあることが非常に重要で、このことが〈気配〉というものを互いに感じ合い、通じ合うことを可能にします。

〈オフライン同期〉は、だれが〈マスター〉(主)でだれが〈スレー



〔リードがあればビートが揃う〕という錯覚／迷信を粉碎する〈ケチャ〉

ブ) (従) かという分けへだて (分化) がないことが特徴です。分化がないケチャでは、「ずれ」(時差) が発生する仕組み自体が存在しない状態がローカルにつくられ、そのローカルな「お隣さん同士」が継ぎ目なく拵がって、円陣全体を形成するのです。この構造により、どんなに円陣が大きくなっても、その内部のどこにも時差が生じることはない一系乱れぬケチャが可能になります。そして、このようなケチャを演じている各〈単個体〉同士は、ここで詳しく述べるいとまがないのですが、〔ホモ・サピエンスに普遍的にプリセットされた〈群個体協調脳機能〉の働きを共有化〕しており、この脳の働きの同一性が〈オフライン同期〉を可能にしているのです。

このケチャの体験は、しかし、〈客観性をもった記号分節構造〉すなわち〈言語・記号〉に変換して他人に伝達することがきわめて困難です。ところがひとたびケチャの環に加わり、〈オフライン同期〉を実現すると、〈気配の察知〉〈以心伝心〉〈阿吽の呼吸〉を体感することとなり、初めてケチャに加わる人でも、自然にシンクロしていくようになります。そうすると、あの驚異の16ビートが自分にもできるということが、経験知として理屈抜きでわかってくるのです。

絆の科学・技術・芸術でいのちたちを直に結ぶ〈ケチャ〉

ケチャは4種類のパターンに基づく4人の小ユニット(コミュニティ)から始まり、この小さなコミュニティがオフライン同期体の基礎ユニットを構成し、このユニットが継ぎ目なく拵がって円陣全体を巨大なオフライン同期体として構築することで、〈言葉〉や〈指揮者〉なしに大規模でありながら時差のない〈表

現コミュニティ〉を実現します。そこに散智の姿というものを観ることができるでしょう。

その真髄は、特殊な技能や訓練なしに、誰もが本来(デフォルト)もっている遺伝子と脳にプリセットされた〈群個体協調脳機能〉をフルに発揮させることで、人間の脳に埋め込まれた〈オフライン同期〉の真髄となる〈阿吽の呼吸〉や〈以心伝心〉を実現する〔絆の脳機能〕の働きです。

それは、人のつながりを〈言語脳〉で構築する〈オンライン同期〉ではありません。ネットを通じた〈離散脳〉の司る〈記号分節〉世界でもありません。人と人、いいかえると「いのち」そのものを、〈群個体協調脳機能〉によって直に結ぶ営みそのものが〈オフライン同期〉なのです。このことを可能にする〔絆の脳機能〕の中核〈群個体協調脳機能〉は、ホモ・サピエンスの本来(デフォルト)としてどんな人にも、等しく与えられています。

この〔絆の脳機能〕の真髄〈オフライン同期〉を誰もが簡単に実感できる特別なケースがケチャです。ケチャはいうならば〈絆〉を可視化・可聴化・可触化した〔絆の科学〕であり、〈絆〉を実践・堪能・陶醉可能にした〔絆の技術〕であり、〈絆〉を祝祭化・儀礼化・様式化した〔絆の芸術〕だからです。



〔スマホさえあれば〕という錯覚／迷信を打破する〈ケチャ〉

スマホ依存は人類史レベルの危機

スマホとその背景にあるAIは人間の知識、情報活動を大きくサポートしてくれています。とりわけ、人と人とをたやすく繋ぐ機能の貢献は量り知れません。ところが、それが導く副作用としての脳への打撃も著しく、それが人類史レベルの危機を宿している事実を、否定できません。

子供が〈スマホ依存〉に陥ったときの身体的・精神的な影響は、当然のことながら、大人以上といわれています。一部の研究では、友達と直接向き合う代わりに、スマホやタブレットなどに長時間を費やす中高生の間で、うつ、孤独感、不眠症、自殺志向が急増しています。これに注目した世界保健機構(WHO)は今年5月25日、スマホなどを使用した〈ゲーム依存症〉を初めて疾病として認定し、〔治療が必要な疾患〕と位置づけています。こうしたスマホのリスクについて私たちは、まだ人びとの関心がなかった昨年のケチャまつりのメインテーマに掲げました。ほどなく〈スマホ中毒〉は世界的に蔓延し、社会問題になっています。

〈スマホ中毒〉は、ドラッグやアルコールなどの「物質」への依存症とは異なり、「情報」によって引き起こされるという点でより深刻です。物質への依存症が、それから遮断されれば回復の可能性があるのに対して、スマホに代表されるサイバー空間での「高度に人工的な情報環境」は、いつでもどこにいても、人類が進化の過程で遭遇したことのない情報を造り瞬時に伝播させ、人間の脳の情報処理と適合しない状態を引き起こし持続させるという問題を生み出しています。

人間本来からの逸脱

〈スマホ中毒〉の原因は、この道具が人間本来(デフォルト)のコミュニケーションのあり方から逸脱した形を採っていることによります。そもそも、人と人とを結ぶ〈絆〉は、私たちが人類になる前の祖先から受け継ぎ進化させてきた〈気配〉〈以心伝心〉〈阿吽の呼吸〉といった〈群个体協調脳機能〉の土台の上に築かれたものです。さらにその上に、大型類人猿だけが進化的に手に入れた〈離散脳機能モジュール〉の働きによる〈記号分節処理〉(ことばの脳機能)を特に発達させたホモ・サピエンスに

スマホは新参の脳の限られた活性に通じるだけ

- ◆従来、左脳(言語脳)と右脳(非言語脳)という区分で捉えられていた人間の脳は、実際には大半が左右対称の非言語脳であり、言語脳モジュールは左脳上に増設されたごく一部。
- ◆スマホがもたらした利便性は知識、知恵、コミュニケーションなど量り知れない。
- ◆しかし、〈スマホ〉が扱えるのは、〈言葉〉のごく一部である〈記号分節〉だけ。これを処理する脳の働きも、左脳の上にアドオンされた〈言語性脳機能モジュール〉という進化的に一番新参の「駆け出し脳」。いわば〈追加部品〉。連続性・渾然性・流動性を扱えない。



〔スマホさえあれば〕という錯覚／迷信を打破する〈ケチャ〉

は、〈ことば〉として〈明晰判明知〉の機能が増設され、飛躍的に次元の高い情報伝達が可能になっています。

一方、〈スマホ〉というものは、この〈ことば〉というもののごく一部である〈記号分節〉という構造だけしか扱えません。デジタル化（＝記号文節化）されて扱われる映像や音も本質的には同じです。これを扱う脳の働きは、左脳の上にアドオン（増設）された〈言語性脳機能モジュール〉という、進化的に一番新参の、いわば〈追加部品〉の機能に過ぎないのです。〈スマホ〉は、実はこの脳の〈追加モジュール〉が扱えるものしか受け入れてくれず伝えてもくれない、対象が明瞭に限定された道具だということを承知して使わなければなりません。特に無視できないのは、それが〈非言語性脳機能〉とまったく別次元の情報空間を形成し、互いに通じ合うことが原理的に困難、あるいは不可能だからです。

つまりこうした仕組みによって、〈スマホ〉は〈非言語性脳機能〉、人と人とを直に結ぶ〈群个体協調脳機能〉、いかえれば〔絆の脳機能〕を衰えさせ減ぼしていくという恐ろしい副作用をもってしまったのです。特に、幼い脳に〈スマホ〉が与

えられてしまった場合、子供たちは、〈絆〉という概念すらもたない怪物に育ってしまうかもしれません。

〔絆の脳機能〕をよみがえらせる〈ケチャ〉

〈スマホ〉で奪われた〈絆〉をよみがえらせることは、想像を絶するほど困難です。こうした中で注目される奇蹟的なまでに適切な選択が、ケチャまつりの核心となる〈ケチャ〉の体験、そして実践なのです。

なぜなら、〈ケチャ〉こそは〈絆〉を可視化・可聴化・可触化した〔絆の科学〕であり、〈絆〉を実践・堪能・陶酔可能にした〔絆の技術〕であり、〈絆〉を祝祭化・儀礼化・様式化した〔絆の芸術〕だからです。これらの背景として、〈非言語性脳機能〉や〈群个体協調脳機能〉の自然で著しい高まりがケチャで実現します。

〈スマホ〉からの最大の脅威が〔絆の脳機能の破壊〕であるなら、その破壊力を無力化する決定的な存在こそがケチャなのです。

子供たちの脳への差し迫った危機を観据えて、今年のケチャまつりでは、「今こそケチャ！」を合言葉に、より大きなケチャの環とより熱い絆で結ばれた群れを実現し、来場される皆様と一体となってまつりを創ることを目指します。そしてこの合言葉を、より多くの人がと、特に未来を担う子供たちに、〈スマホ〉に負けない健やかな脳と躰をつくってもらうためのキーワードとして掲げます。

山城組のケチャの環には、子供たちも参加しています。ご支援をお願いするとともに、ご自身やお子さんたちも、ぜひケチャの環に加わってその醍醐味を味わいながら、〔絆の脳機能〕を活性化していただければ幸いです。

脳の祖形の発生からの歳月

5億年前	脊索動物の脳の祖形	50歳
3000万年前	旧世界ザルと分岐	3歳
2000万年前	大型類人猿登場	2歳
700万年前	人類登場・二足歩行	8ヶ月
250万年前	石器の使用	3ヶ月
160万年前	火の使用	2ヶ月
21～16万年前	現生人類登場	6日
7.5万年前	シンボル操作・言語の使用	2日（諸説あり）

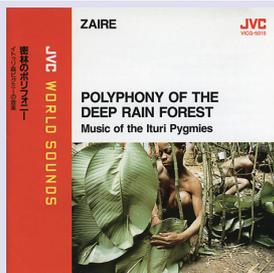
脳の進化史を50年とすると、脳が言語を扱うようになったのは、わずか2日前！

〔芸術で食っていく〕という錯覚／迷信を追放する〈ケチャ〉

密林の奇蹟

1983年、芸能山城組組頭・山城祥二はアフリカ最深部の巨大な熱帯雨林〈イトゥリ森〉に、最後は自身の足で100kmを走破する探検を敢行し、原初性がもっとも高いといわれているムブティ・ピグミーさんたちを訪ねました。その時のピグミーさんたちの歌声を記録したJVCワールドサウンズ『密林のポリフォニー』は、高い音質のCDとして公開されています。それらピグミーさんたちの音楽のインパクトを山城は、「私の魂を躰ごと吹き飛ばしてしまう衝撃そのもの」と述べています。高度な形式、優美で繊細な表情、そして音楽の確かな成就など、人類にとってのひとつの極致を思わせる、桁外れなものだったからです。

さらに驚いたのは、CDに収録されたポリフォニーを西欧音楽の〈五線譜〉上に採譜してみると、そこに、ルネサンス期ヨーロッパ最高のポリフォニー作曲家ジョヴァンニ・ピエルルイージ・ダ・パレストリーナの作品そっくりの美しい旋律線をもつ楽譜が姿を顕わしたのです。しかもパレストリーナでは、楽譜に書かれたひとつのパートを複数の人間が唱うのに対して、ピグミーさんたちでは何と、ひとりが1パート、しかもすべて即興、という信じられない超絶の技が振るわれているのです。さらに、このセッションの主力は、10才前後の子供たちです。その上この人びとには、〔演奏に先立つ練習・学習・稽古〕とい



た仕組が存在せず、すべては常に〈本番〉として実行されていたのです。

文明化に伴って劣化する芸術的活性？

進化人類学的に観ると、このように途方もなく高度な形式・内容をもつパフォーマンスが、それを〔演技奏でる技量〕そして〔それを楽しむ脳機能〕とともに、少なくとも数千年前から、もしかすると数万年前あるいはそれ以上の太古からホモ・サピエンスに実践し継がれてきた可能性さえ、否定できません。

こうした活性をすべての構成員が身に付けている文化現象、社会現象、そして生命現象は、ムブティ・ピグミーなど狩猟採集社会に観ることができるとは、高度に文明化した社会にはまったく見ることができません。〔文明化に伴って劣化する芸術的活性〕のたいへん顕著な例として、私たちは音楽という現象を見過ごしてはならないのではないのでしょうか。このピグミーさんとの出会いは山城に、その思考・行動のプラットフォーム



パレストリーナ作品「アヴェ・レジーナ・チェロルム」の一部



ムブティ・ピグミーのポリフォニー

〔芸術で食っていく〕という錯覚／迷信を追放する〈ケチャ〉

となっている近現代文明に、激しい疑義を芽生えさせました。そして、近現代文明の枠組を超え、より生命科学的に矛盾の少ない思考・行動の枠組を求める山城の人生の新たな旅立ちが始まったといえます。

芸術の宝庫・バリ島の示唆

熱帯雨林ほどアプローチの危険や負担の多くない別の例は〈ケチャ〉を生み出した〈インドネシア・バリ島〉です。例えばニューヨークで活躍したメキシコ人画家、ミゲル・コバルビアスは、不朽の名著『バリ島』(1939)の中で、「バリ島では誰もかれも芸術家に見える。苦力も王族も、祭司も農民も、男も女もみな、踊れるか、楽器を演奏できるか、木や石の彫刻ができる」「私たちの地域の有名な楽団のリーダーのうちひとり苦力、もうひとり金銀細工師で、三人目はお抱え運転手だった」と述べています。

ここに描かれたバリ島の社会構造は、現在でも本質的に変わっていません。今やバリ島にも国立の芸術大学が設立され、制度的教育が行われてはいます。しかしその人びとの本拠は農村の地域共同体で、身分も多くは農民です。そして、共同体の先人たちが手を取って音楽や踊りを教える、〈稽古〉という一種の慣行的かつ制度的な色あいま加味された学習が村ごとに準備されていて、それが固有の形式・内容を持続させる強固な基盤になっています。そして、特別な注目が必要なのは、パフォーマンスの宝庫・バリ島においては、芸術だけで生計を立て〔芸術で食っていく〕専門的・職業的な芸術家は観られなかった、いいかえると、すべてのアーティストたちは、すべて完全なア

マチュアであった、という歴史的事実です。

密林の奇蹟から都市の奇蹟へ

現在の〈専門家〉を育成するための〈専門教育〉は〔排他的単機能化〕の原理の上に成り立っています。そもそもホモ・サピエンスが遺伝子レベルで具えている全方位的活性の中から、特定の一領域にかかわる活性に限定して成長、成熟を図る一方で、それ以外のすべての活性を抑圧ないし排除する、というのがその原理です。そうした〈専門教育〉には膨大な時間とエネルギーそして巨額の資金を費やす上に、激しい競争を勝ち抜くことが不可欠で、これらにより〔芸術で食っていく〕ことの成功確率は極めて低いものになっています。

それに対して、幸いにもその実像に触れることができたピグミーさんやバリ島の皆さんをお手本にして私たちは、〔ホモ・サピエンス本来の遺伝子に埋め込まれたパフォーマンスの種〕を素直に呼び出して芸術の専門教育をまったく受けずに〔演じ奏で楽しむ〕、というやり方が存在していることに気付きました。そしてそれを現代社会で実現するために、生命科学をはじめさまざまな知恵を集めて手創りの試行錯誤を続けてきました。

〔ホモ・サピエンスの遺伝子に約束された脳機能の全方位性〕を素直に活かし尽くし、ピグミーさんたちが密林で実現している奇蹟を現代都市に蘇らせる……。この夢はすでに、幾たびか現実化しています(その一部は、この冊子の24～27ページをご覧ください)。ケチャまつりはそれをあなた自身が体感する場でもあるのです。

(3つのメッセージの起草：谷島昭、村上一郎、市川寛道、渡邊有晴)

山城組を読み解くキーワード

群个体協調脳機能

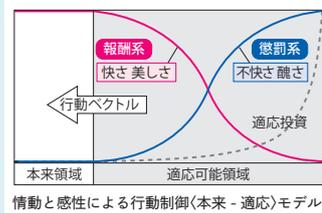
狩猟採集で生きる人びとでは、その〈群れ〉を構成する複数の脳たちが、部分的には不一致を含みながらも、全体としては互いに共鳴し、協調状態を保っている状態がひろく観られます。この状態にある脳たちを〈群个体協調脳〉と呼びます。〈以心伝心〉〈阿牛の呼吸〉など、絶妙な心の働きの源泉です。

これに対して、個体ごとに独立かつ個別的に動くのが〈単个体独動脳〉です。この両者の関係は、遺伝子に約束された〈本来〉(デフォールトゾーン・フェイズ)としては、圧倒的に〈群个体協調脳〉が優越しており、〈単个体独動脳〉としての動きは従属的です。

ところが近現代の文明社会では、〔群个体協調脳〕の〈単个体独動脳〉たちに対する優越くつがえという動物界の原則は覆っています。これは、ホモ・サピエンスの遺伝子に約束された〈本来の基準設定〉から乖離した状態と観ることができます。

報酬系主導の自己組織化

高等動物の脳には、快さ美しさを生み出す報酬系神経回路と、不快や苦しさを生み出す懲罰系神経回路とで構成される行動制御の仕組みが具わっています。脳の報酬系はそれぞれの動物の進化の舞台となった〈本来〉の環境のなかで、遺伝子に約束された〈本来〉の生き方で生きるときに最大の快感を発生させ、そこから離れ適応努力を払う度合が高まるにつれて快感が低下するように働きます。懲罰系は反対に、〈本来〉の領域で不快感が最小となり、そこから離れ適応度合が高まるに



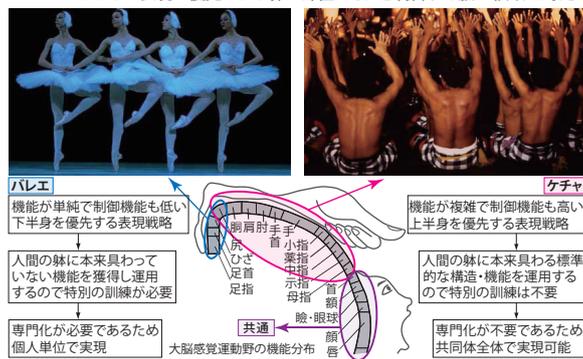
つれて不快感が増します。つまり、報酬系が〈鉛〉、懲罰系が〈鞭〉として働き、動物の行動をおのずと〈本来〉の領域に誘導しています。

ケチャをはじめとするバリ島の祝祭芸能には、脳の報酬系を活性化する遺伝子に約束されたシグナルが溢れ、その快感に導かれてバリ島の人々は自律的に共同体に結集します。報酬系主導の〈自己組織化〉により、バリ島では強固な共同体が今も維持されているのです。

〈本来指向〉という表現戦略

西洋クラシックバレエでは、下肢が表現・演出戦略上、決定的な役割を果たします。しかし、下肢の制御に割り当てられている大脳皮質感覚運動野の面積が顔や手に較べてずっと少ないことから明らかなように、その機能は上半身に較べてはるかに単純です。そうした身体部位を表現の主力にするためには、特別の訓練を行って必要な機能を後天的に獲得・運用しなければなりません。普通の人間ではできない、つまり人類の本来の機能や活性からの乖離が^{くつがえ}及されます。

バレエとケチャの表現で優先される体の部位とそれを制御する脳の領域の対比



山城組を読み解くキーワード

一方、ケチャの表現の主力である背中や腕、手・指を含む上肢は、関節や筋肉の機構が高度に複雑に発展し、それらを制御する感覚運動野も下肢よりはるかに潤沢に割り当てられています。しかも、動作機能の低い下半身は、衣裳や体位で巧妙に隠されます。そのためバリ島の村人は、日常の行動の延長線上の所作でケチャの名技名演を実現しているのです。このように、遺伝子と脳に拘束された人類本来の活性を尊重する〈本来指向〉の戦略は、表現のみならずバリ島社会のさまざまな側面で観られ、社会の快適性を高めています。

〈文化〉という名の脳機能体系

人類を含む社会性動物の脳には、生まれた時には空白状態で、生後、原則1回だけ、特定の情報が体験を通じて刷り込まれるライトワンス・メモリのような長期記憶を受けもつ領域があります。そこに刷り込まれた記憶は、言語や作法をはじめ社会行動全般を規定し、社会ごとに個性・固有性をもち、原則として生涯固定保持されます。いわばコンピューターの〈OS〉(システムソフトウェア)のようなものです。そうして形成された、同一社会生態系に生きる動物が共有すべきソフトウェアの総体が〈文化〉の実態、つまり〈文化〉という名の脳機能体系である、というのが、組頭山城祥二こと科学者大橋力オリジナルの〈文化〉についての生命科学的定義です。

こうした文化という脳機能体系の高度な同一性、同位相性(コヒーレンス)が実現している社会集団が、〈共同体〉です。しかし日進月歩の近現代社会では、刷り込まれる情報が刻々と変化しつつ固定されるため脳機能の同一化が妨げられ、ソーシャル・コヒーレンスの成立は不可能になります。文化という脳機能体系が不一致な人びとの間の軋轢が、多くの社会的対立ひいては戦争を惹き起こしていることと観ることもできます。

(山崎公子、ハ木玲子、仁科エミ)

奇蹟の芸能〈ケチャ〉を一緒にやりませんか

ケチャまつりまでの毎日、どなたにも“ケチャ”を体験いただける稽古を、東中野にある稽古場で実施しています。

◆日 時：毎日実施しています。

平 日：19:00～20:30

土・日：午後

◆場 所：芸能山城組稽古場(JR東中野駅 徒歩5分)

*稽古の内容により時間、場所が変わることがあります。

*時間帯など、ご要望があれば調整しますので、お気軽にご連絡ください。

〔稽古参加手順〕

体験稽古を希望される方は、以下のいずれかの方法で事前にお申込みください。お待ちしております。

① 芸能山城組公式ホームページ

QRコードまたは、以下に直接アクセスしてください。
<https://www.yamashirogumi.jp/event/2019cakkeiko/>

② メールアドレス

enjinmae@gmail.com



山城祥二 とは何者か

組頭・山城祥二こと大橋力の活性の全体像を捉えることは、容易ではない。しかし、少なくとも2つの切り口からのアプローチが役に立つことは間違いない。そのひとつは、山城のアクティビティが、現代の自然科学のいくつかの専門領域、そしていくつかの人文科学をカバーし、しかもそれぞれ分野において抜きんでたレベルを実現していることだ。

詳細は業績リスト(24, 25ページ)に譲るが、例えば研究面では、〈ハイパーニック・エフェクト〉を発見、そして芸術面では、アニメ『アキラ』の音楽で世界的な人気を博している。1個の頭脳がカバーするものとしては破格の広さと高さである。ここに象徴される活性の全方位性とそれぞれの質の高さが、第一の活性像を構成している。

もうひとつの活性像は、知的活動を加速する新しい「概念道具」を発明する名手、おそらく天才であろうことだ。そのハイライトとして、彼の創った〈本来〉という生物学の概念道具に注目してみる。地球生命のそれぞれの種は、己が進化的適応を遂げた特定の環境とあたかも〈鍵と鍵穴〉のようにぴったり合った活性を、遺伝子レベルで実現している。こうした〔特定生命種と特定環境との特異的かつ全面的な適合状態〕に対するこれまで空白だった科学的概念道具として〈本来〉(デフォルト)を構築した。

現代生物学では、学習や経験によってできなかったことができるようになる(適応)現象が研究者の関心を集めてきた。現代生物学=適応の生物学ともいえる。これに対して山城の発明による〈本来〉という概念道具は、「あるがままの生命とあるがままの環境とが美しく調和した生き方」を示した。それは現代生物学に由来する「生きることは、困難に耐え、努力し、克服し、自分を造り替えること」という偏った生命観から人類を解放放つ。

その他に、〈もっとも貴いもの=地球〉〈プログラムされた自己解体〉〈生命文明〉〈利他の惑星〉など、山城によって発明された概念道具は、(それが山城の発明であることを知らない人をも含め)多くの人の知的作業に量り知れない恩恵をもたらしている。

山城が生み出すこうした概念道具に共通する特徴は、何か新しいものを造り出すのではなく、埋もれている実体や真実を「掘り起こす」点である。掘り起こされるまでは誰も想像すらしないのに、いったん掘り起こされると

あたかも最初からそこにあったかのように、当たり前で自然に感じてしまう。

以上は通念の枠組で捉えやすい山城の活性像である。しかし山城には、彼の身近で彼と一体化して長い年月行動してきた人間でないかと思うことができな不思議な活性が、きわめて稀にはあるかと思われる。その驚きに満ちた事実を、ごく限られた体験者の1人として証言することは、自分の使命と考える。

まず、私自身が遭遇した象徴的な出来事について、具体的に述べる。その頃、私たち文明科学研究所の研究チームは、人類発祥の地アフリカ、カメルーンの熱帯雨林で今も狩猟採集のライフスタイルを堅持するピグミーさんたちが、どんな環境の中でどんな暮らしをしているか調査していた。日本の何十倍もの面積をもつ密林で移動生活をしているピグミーさんに出遭うことは、グラウンドに落ちた1本の針を探すより難しいといわれている。そんな日々を送る2009年8月14日のこと、山城はかろうじて自動車が行ける道すがら見出した何の変哲もない1本の小徑



山城が発見したピグミーのキャンプ

に注目し、「あの途の奥にビーちゃんのニオイがする」と突然言い出したのだ。これには現地コーディネーターも驚いて、付近にピグミーの村があるとは聞いていないと断言する。しかし山城はゆずらず、後を追って2キロ足らず進むと、木立の間に葉っぱの家からなる集落が忽然と姿を現したのだ。

問題は、このときどうやってそれを見抜いたのか、山城本人にもまったく解っていないのである。「途の探索」という〈未知〉の範疇下にある彼の脳的思考・行動の過程に、(既知)と区別のつかない状態で「仮想的な途の情報」が介入し、置き換わってしまっていた。しかもそれが実体を正確に反映していた。という、理解不能な現象が顕れたのである。

本人にインタビューすると、その内容は「デカルト的明晰判明知」を構成し、離散性有限性が明白で曖昧さはまったく認められない、という。この点で、

山城祥二 とは何者か

いわゆる「既視感(デジャヴュ)」とも一致しない。この新たに知られた脳機能に対して、山城は、〈仮想既知覚〉という新しい概念道具を創り対応させている。

こうした不思議な現象は、「奇蹟的」と呼ばれるようなきわめて低い確率で人類の脳に惹起されるのかも知れない。ところがこの奇蹟のような現象が、山城には再現しているのだ。私自身はビッグミーさんの件を含め都合3回にわたって、それを体験している。

そのもうひとつの例は、「耳で音として感じるができない高周波を、身体のどこで感知しているのか?」というハイパーソニック・エフェクト最大の謎に答えを出した実験である。山城は、それを「体の表面である」とする〈仮想既知覚〉から導いた図に示す4つの実験から、ほぼ完璧に証明している。ここで注目すべきは、実験計画が「必要なものをすべて含む」と同時に「不要なものはひとつも含まない」というデカルト的明晰判明の構造を具現しており、山城の〈仮想既知覚〉のもつ「正確性」を反映している。

さらなるもうひとつは、生物が不適切な環境に遭遇すると、自らを解体して土に還す〈プログラムされた自己解体〉が地球生命に実在することを実証した実験。単細胞生物「テトラヒメナ」のDNAに、「生きるのに不都合

これらに共通するのは、通常の科学研究では定石とされる先行研究の調査どころか、試行錯誤のパイロット実験すら実施せず、いきなり核心を突く実験だけが実行されていることだ。本人にインタビューしたところ、こうした脳の動きは、自覚的にはまったく制御できず、非常に稀に、天与のごとくいつの間にか恵まれている、ということだ。しかし身近にいると、山城がこうした〈仮想既知覚〉を「不可視のレベルで平素からマイクロに発揮しているのでは…」という感覚を否定することができない。

厄介なのは、このような山城がどう見ても「普通の人」の佇まいをたえていることだろう。ケチャまつりでは、音響卓を操作する山城をスタッフと勘違いして、演目の開始時刻を尋ねる人も多い。情が深く義に厚い。食いしん坊で美味しいものを見つける情熱と才能は当代随一。その結果、多くの人にとって、山城と自分との距離を実感しにくいことは、私の経験から指摘しておくべきだろう。あたかも遠くの大きな山が近くに見えるように、手が届きそうなのに近づけば近づくほど遠ざかるのである。

このような山城の脳は、ホモ・サピエンスの「正常」から少なからず逸脱している。それを「病理」として捉えるか、「進化」または「退化」の尺度で捉えるかは、無視できない課題だ。私見を述べるなら、おそらく山城の脳では、非言語脳の動きと言語脳の動きとが、理想的なバランスで成立しているのだと思われる。彼自身が著書『音と文明』の中で指摘しているように、人間を含むあらゆる動物の脳本体は非言語脳で、言語脳はその上に造り付けられた進化的に未熟なモジュールに過ぎない(これも、山城が発明した概念道具である)。非言語脳は、絶えず複雑に変化する膨大な環境情報を包括的に処理し最適行動に結びつける。ビッグミーさんの村の発掘も、ハイパーソニックの発見も、美味しいものを探し当てる嗅覚も、そうした非言語脳をフルに働かせたアウトプットであるため、必然的に、本人も周りも言葉で説明することができないのであろう。人工知能AIによるビッグデータのディープレARNINGでは決して追いつくことのできない、地球生命の脳の進化の最前線、というのは果たして言い過ぎだろうか。こうした脳を搭載する山城を頭にした私たちに課せられた地球史的な重みを思うとき、身震いを禁じ得ない。

(本田 学)



芸能山城組のアウトプット

受賞 (技粋)

国際賞

- ダルマ・クスマ勲章 (インドネシア・バリ島の文化勲章) (山城祥二, 1992)
- グルジア国際文化賞 (1990)
- NHK テレビ音楽劇「虎落笛」: イタリア賞・イタリア放送協会賞 (1976)
- テレビCM「クリネックス」: 国際放送広告賞 (1978) クリオ賞 (1979)
- ラジオCM (ソニー): クリオ賞 (1980)
- 中山賞大賞 (生命科学の国際賞) (大橋 力, 2000)
- ECAL (欧州人工生命会議) ベスト論文賞 (前川督雄, 2011)
- ベストソリスト賞 (全ソ連邦合唱音楽祭典) (大滝 伸, 1988)
- LD「アキラ/サウンド・クリップ」by 芸能山城組: AVAグランプリ (1988)

国内賞

- ラジオCM (ソニー): ACC 賞ほか (1979)
- 第5弾LP「芸能山城組ライブ」: 日本レコード大賞企画賞 (1979)
- 映画「AKIRA」の音楽: 日本アニメ大賞最優秀音楽賞 (1989)
- 旅の文化賞 (1994)
- 日本バーチャルリアリティ学会論文賞 (森本雅子ほか, 1999)
- 木村重信民族芸術学会賞 (大橋 力, 2004)
- 日本プロ音楽録音賞ハイレゾリューション部門「審査員特別賞」(大橋 力, 2015)

音楽・映像作品 (技粋)

- 芸能山城組オリジナルCD・LP全16タイトル (ビクターエンタテインメント)
 - 「恐山/銅の剣舞」(1976)・「地の響」(1976)・「やまと幻唄」(1977)・「黄金鱗讃揚」(1978)・「芸能山城組ライブ “開かれた合唱” 十年の展開」(1979)・「少年達への地球讃歌」(1980)・「シルクロード幻唄」(1981)・「ビザンチンの響」(1981)・「アフリカ幻唄」(1982)・「輪廻交響楽」(1986)・「Symphonic Suite AKIRA (交響組曲アキラ)」(1988)・「芸能山城組入門」(1988)・「翠星交響楽 Ecophony Gaia」(1990)ほか
- JVC ワールドサウンドスCD全101タイトル (ビクターエンタテインメント) 企画・構成: 山城祥二, 録音・解説・写真: 大橋 力
- DVD / Blu-ray ディスク
 - 「AKIRA DVD SPECIAL EDITION」ノンダイジジュアル (DVD, 2001)
 - 「Symphonic Suite AKIRA 2002」ビクターエンタテインメント (DVD-Audio, 2002)
 - ハイパーソニック Blu-ray 「AKIRA」ノンダイジジュアル (2009)
 - ハイレゾリューションオーディオ配信コンテンツ (ハイパーソニック・ハイレゾ音源 by オオハシ・ツトム) (e-onkyo 他から配信)
 - 第一弾: 「恐山/銅の剣舞」・「チベット密教 極彩の響き」・「超絶のスーパー

- ガムラン ヤマサリ」・ハイパーソニックオルゴール「トロイメライ」(2014)
- 第二弾: 「輪廻交響楽」・「ブルガリアン・ポリフォニー(1)」・ハイパーソニックオルゴール「卒業写真」(2015)
- 第三弾: 「交響組曲 AKIRA 2016」(2016)
- オリジナルLP (米國 Milan Records)
- 「Symphonic Suite AKIRA」LP2 枚組 (山城祥二監修による DSD 11.2MHz のハイパーハイレゾ音源を使用) (2017)

著作 (技粋)

- 機関誌「季刊地球」, 1975-1984年, 芸能山城組出版局
- 群れ創り学, 山城祥二, 1981年, 徳間書店
- 情報環境学, 大橋 力, 1989年, 朝倉書店
- 音と文明—音の環境学とはじめ, 大橋 力, 2003年, 岩波書店
- 脳のなかの有限と無限, 大橋 力, 「科学」, 2006-2015年, 年4回連載, 岩波書店
- ハイパーソニック・エフェクト: 超高周波が導く新たな健康科学, 大橋 力他, 「科学」2013年3月号, 岩波書店
- 音楽・情報・脳, 仁科エミ・河合徳枝編著, 2013年, 放送大学教育振興会
- ハイパーソニック・エフェクト, 大橋 力, 2017年, 岩波書店
- 利他の惑星・地球, 大橋 力, 「科学」, 2019年4月号から毎月連載中, 岩波書店

論文 (技粋)

- プログラムされた自己解体モデル, 大橋他, 科学基礎論研究, 18, 21-29, 1987.
- Inaudible high-frequency sounds affect brain activity: Hypersonic effect, Oohashi T, et al., Journal of Neurophysiology, 83, 3548-58, 2000.
- Catecholamines and opioid peptides increase in plasma in humans during possession trances. Kawai N, et al., NeuroReport, 12, 3419-23, 2001.
- Artificial life based on the programmed self-decomposition model: SIVA, Oohashi T, et al., Journal of Artificial Life and Robotics, 5, 77-87, 2001.
- Electroencephalographic measurement of possession trance in the field, Oohashi T, et al., Clinical Neurophysiology, 113, 435-45, 2002.
- The role of biological system other than auditory air-conduction in the emergence of the hypersonic effect, Oohashi T, et al., Brain research 1073-74, 339-47, 2006.
- Frequencies of inaudible high-frequency sounds differentially affect brain activity: positive and negative hypersonic effects, Fukushima A, et al., PLoS One, 9, e95464, 2014.
- Electroencephalogram characteristics during possession trances in healthy individuals, Kawai N, et al., Neuroreport, 28, 949-55, 2017.
- Induction of prolonged natural lifespans in mice exposed to acoustic environmental enrichment, Yamashita Y, et al., Sci Rep., 8, 7909, 2018.

業績ハイライト

『交響組曲AKIRA』のLPが米国でリリース、ビルボードチャート5位



CDの限界をこえるLPレコード化への熱望のなかで、自ら山城を訪ねた米国ミランレコード社副社長 Chamboredon 氏のすばらしい感性と見識に共感した山城は『交響組曲 AKIRA』のLP化を承諾。LP版『Symphonic Suite AKIRA』が発売されました。ハイパーハイレゾ版『交響組曲 AKIRA 2016』のデジタル音源(11.2MHz DSD)をもとに原盤をカットングした贅沢な2枚組のLPアルバムです。米国の超一流エンジニアが担当し、常識を超えた冒険的な手法で超高級のサウンドを実現しています。米国ビルボード・チャートのアナログ・レコード部門で第5位に輝き、Pitchfork のレビューでも、「日本映画史におけるもっとも重要な映画音楽のひとつ」「目を閉じれば登場人物の傍らに在るかのような臨場感」といった賛辞とともに8.4という高スコアを得、その月の「ベストアルバム」に選ばれました。

百年後も読み継がれる 古典『音と文明』



山城祥二=大橋力著『音と文明—音の環境学ことはじめ』が、岩波書店創立百年に際して「編集者が選ぶ百年後も読み継がれる岩波の本」単行本編六冊に、寺島実郎、船橋洋一、後藤乾一、柄谷行人、キッシンジャー各氏の著書とともに選ばれました。「2000年1月以降に発行された岩波の本のなかから、百年後も書棚に残るものを岩波書店の編集部が厳選したもので、「今後増刷を重ねやがてロングセラーと称されるようになるはず」(岩波書店編集部)とのことです。

音楽は地球を救う? パリ島に行ってガムランのシャワーづけになると、なぜ人は気持ちよいのか? 現代都市の音環境はなぜ健康に悪いのか? 音のある環境が人の脳に与える影響を音響工学から解説し、現代文明の行方に警鐘を鳴らした画期的傑作。(岩波書店単行本編集部)

〈利他的遺伝子の優越〉が国際学会のベスト論文賞!



1980年代に大橋力(山城祥二)がモデル化したプログラムされた自己解体とその利他的作用についての研究論文が、人工生命の二大国際学会のひとつ ECAL の二十周年記念大会(2011年、パリ)に採択され、山城組文明研前川督雄四日市大学教授により発表されました。「死の遺伝子プログラムの進化的獲得」と題する発表は、人工生命の原点に立ち返ることをテーマにしたこの大会で、わずか10名のベスト論文賞に選ばれ、この分野で最大の Artificial Life 誌にも掲載されました。

芸能山城組のハイパーハイレゾ音源 一絶賛配信中!!



『恐山/銅之剣舞』



『輪廻交響楽』



『交響組曲 AKIRA 2016』

16タイトルのLP・CDをリリースし、日本レコード大賞企画賞も受賞した芸能山城組。しかし、サウンドの魅力を決定的に決定づけていたLPの超高周波成分は、CDでは記録・再生ができませんでした。こうしたなか満を持して、魂を天外に翔ばす〈ハイパーソニック・ハイレゾ音源〉の配信が開始され、「恐山/銅之剣舞」と山城=大橋監修 JVC ワールドサウンドズとが「2014年間総合ランキング100」の上位を占めました。

日本プロ音楽録音賞ハイレゾ部門「審査員特別賞」受賞



大橋力(山城祥二)が2015年12月、第22回日本プロ音楽録音賞ハイレゾリレーション部門「審査員特別賞」を受賞しました。受賞対象となったのは、11.2MHz DSD規格『超絶のスーパーガムランヤマサリ』の楽曲「ウジャン・マス」です。これは、インドネシア・バリ島で最高峰と讃えられるガムラングループ「ヤマサリ」の名演を、オリジナル開発した11.2MHzマルチトラックDSDレコーダーにより大橋自ら現地録音し、超高周波成分をもらさず編集・制作した作品です。

四十五年前に誕生してこのかた、われわれは〈規約〉とか
 〈綱領〉とかの決めごとを造り掲げたためしが無い。
 正規の組織図というものもないので、「誰よりも誰がエラ
 イのか」皆目わからず、自分で決めるしかない。

上手に群れている獣たちに
 学ぶのがよろしい!

組頭 山城祥二

こんな山城をカシラに
 ルールをもたずに乗ったわれわれは、
 「無法の徒党」といわれても、否定できない。

創流四十五年 こんな集団が
 よくも生き延びているものだ

ところがそのアウトプットは

例えば脳科学分野の専門学術研究誌のひとつ、アメリカ生理学会の刊
 行している Journal of Neurophysiology は、〈実証性〉を何よりも貴び、
 論文のチェックは Nature や Science よりも〈物証〉の面ではるかに
 厳しく、その分、採択された論文の権威も高い。この JNP 誌に、わが
 山城組文明科学研究所メンバーによる論文 “Inaudible High-
 Frequency Sounds Affect Brain Activity: Hypersonic Effect” (聴こえ
 ない高周波音が脳の活性に影響を及ぼす=ハイパーソニック・エフェクト) が 2000 年
 6 月に掲載された。その後、この論文誌のウェブサイトでは毎月発表さ
 れる「もっとも頻繁に読まれている論文」ランキングに、2003 年 12 月
 から 2017 年までベスト 20 位以内 (1 位が 45 カ月) に入り続ける異例
 の注目を集めている。高品位音源配信ハイレゾの登場と前後して閲覧
 頻度は再び高まり、2011 年以来 21 回もの第 1 位を記録した。この閲
 覧頻度は空前のものであり、ノーベル賞が視野に入ってくるのは自然だ。

